

翌日、軍医は右脚を切断しなければ命の保証ができないとの判断だったが、連隊長からの電話で「市川中隊長の脚を切らずに置いてくれ」との懇請で、軍医も「できるだけやってみましょう」とのこと、私の脚の切断が助かり、今にいたっても役にたっている運命の別れ道も、不思議以上の現実である。

徐州の時の左上膊部小銃貫通銃創と、この夜の砲弾破片創を合わせれば、私の首から下は念入りにブチ抜かれたもので、被弾七個、傷痕一〇個となっており、大きいのは今でも約一〇センチ四方ある。まさに近代の「切られる与三郎」であろう。

それ以後は、残念ながら前線を退き、入院を続けて約一か年半後、昭和十八年七月から原隊復帰できた。

傷痍軍人のその後は、十二月から憲兵学校将校学生として主として法律学を修得して、十九年八月末から憲兵分隊長に就任し、部下の適切な補佐のお陰で、翌年三月までの約半年間に、全国にも例の稀な憲兵司令官賞状を二回受けたものである。思いもかけず抜群の成績ということにあいなくて、自分自身も、部下も、驚いたことで

ある。

それがためでもないが、二十年三月、編成改制によって今度は、県の憲兵隊長に就任、二十九歳の八月、終戦を迎えるに至った。

運不運は紙一重

京都府 秋田守之

私は昭和十九年（一九四四年）六月二十二日、臨時召集令状により、中部第三七部隊（京都市伏見区深草、歩兵第九聯隊）に召集されました。当時私は舞鶴海軍軍需部第三課の雇員で、海軍航空燃料の供給担当現場責任者でありました関係上、陸軍部隊への召集猶予者となっております。しかし戦局は日増しにきびしく前線から帰還してくる海軍部隊員の話によると、大本営の発表はほとんど正反対である旨、聞かされていた矢先だけに、海軍の召集猶予手続きなど、なんの効果もなくなった現状に直面して、戦局の厳しさを思い知らされたことでした。

臨時召集令状は六月二十日午後、舞鶴市西大浦出張所長（安田孫太郎氏）より次の伝言とともに妻に伝えられました。

「来る六月二十二日午後二時までに中部第三七部隊に入隊し、即夜軍装整備後直ちにラバウル方向に向かう手筈になっているため、家族との面会はないので充分留意し整理しておくように」とのことでした。この指示をみてよほどの幸運がなければ元気で復員など覚束ないことと覚悟した次第でした。

翌六月二十一日、勤務先での業務引継ぎをすませ、幹部諸官に惜しまれながら役所をあとにした時は、なんともいえないような気持ちで、今生の別れと思いました。親戚その他に連絡をすませると、はや夕方になり、あとのことなど妻に話す暇もなく出征の朝を迎えました。その日のことを四十五年を経た今も思い出します。

六月二十二日、地区の皆さんと家族や親戚の見送りを人生最後の別れと肝に銘じ、列車の人となり、召集令状の指示通り召集部隊に入隊しました。手続きが終わると第四内務班（擲弾筒班）に入りました。

夕食を終わるや否や週番下士官より「本日入隊した召集兵は今晚出発する予定だったが、南方方面から内地に向かっていた輸送船が米軍の攻撃により使用不可能となったので、ラバウル方面行きは中止し、中支方面行きに変更されたから、明日家族との面会が許可されることになった」との伝達がありました。

私は直ちに部隊裏門近くにあった中部三六部隊（旅団指令部）に勤務中であつた板根善二曹長（妻の従兄弟）にたのみ妻に面会許可の事情を電報で知らせてもらいました。病身の妻は私の母に付き添われて舞鶴の辺鄙な山村から約六時間がかりで面会に来てくれました。別れるとき、妻が身につけていた八型の腕時計を形見に受け取って別れました。この腕時計は妻の身代わりとして常に肌身離さず持ち続けました。そして食物がほとんどなくなり病人が出るようになった昭和二十一年二月初旬、中国金三千円で売り、二日おきに中華そばを一食ずつ食べて命をつなぎました。

昭和十九年六月二十五日正午すぎ、京都駅より乗車、下関へは二十六日昼前着。午後一時には下関港より釜山

に向かつて渡船、もちろん潜水艦の護衛付きでした。釜山では午後八時貨物列車の貨車に荷物同様の取扱いで乗車しました。この列車は広軌式のため内地の列車と比較して大型であることになんとなく大陸に來たことを実感しました。

大邱、京城、平壤などを経て鴨綠江を渡ったのは二日後、奉天駅へはその翌朝という状況で、北支山海關到着は昭和十九年七月一日朝七時で、今でもその当時の緊張をはっきり覚えております。

天津からは津浦線を一路南下。沿線各地には汽缶を機銃弾で打ち抜かれ、何両もの機関車が横転しており、かつての激戦のあとがうかがえ、身のしまる思いでありました。

京都を出発してから十日後、ようやく揚子江左岸の浦口から対岸の南京兵站到って、久し振り食器で人並みに昼食にありつけました。

けれども昼間は米空軍の攻撃がきびしいため、揚子江を遡航せず、夜間のみを遡航のため武昌に到着したのは同年七月二十日でした。すぐ嵐兵団の後を追っての前進

もままならず、前線への出発を待つうち、野戦自動車廠で車両修理の要員の募集調査に大工三年以上の経験歴を申告。その結果、同年八月一日付で嵐補充部隊より野戦自動車廠に転属、前線行きと離れ後方勤務兵となりました。八月中トヨタ製貨物車の全分解、組み立てを練習し九月一日付で私は自動車廠武昌支廠に配属され、中隊長より金銭会計の担当責任者を命ぜられました。經理担当の將校も、一応配置されてはいましたが、支隊長（中隊長）はもちろん、本廠（連隊）經理室の主計長も信用しておらず、私は常に中隊長である支隊長の印鑑を所持して行動しておりました。

私の主な任務は横浜正金銀行漢口支店、台湾銀行漢口支店ならびに同支店武昌出張所各口座への受け払いと、部隊の購入物資の代金支払い、中隊將校、下士官の俸給支払いと留守宅への送金、兵員の給料支払い、その他戦没者の遺骨と所持品の処理と内地送金などで、いずれも中隊長の印鑑の不要なものは一つもなく、責任は特に重大であったことはいふまでもありませんでした。

終戦後は中国の借入前渡金の受け払いも処理せねばな

らず、中隊長以下全員使役の道路修理にかり出されても、私だけは免除されましたが、だれ一人不満をいう者はありませんでした。

私は中隊長の信任による責任の重大さに思いを致し、部隊本部の信頼にも十分応えてまいりました。

昭和二十一年三月下旬になって内地送還の話が聞かれるようになったころ、起居をともししていた衛生兵と私が風邪で入院することになり、揚子江の可容鎮という港から漢口市の陸軍病院へ入院しました。その間、隊員は一足先に揚子江を下航して南京市へ向かったので身の不運を思わずにはいられませんでした。幸い入院は短期間でその上、運良く下船の時は、漢口より上海まで直行使が利用でき、伝染病が大流行していた南京を通過せずですんだことは幸運でした。

上海には約一か月待機、二十一年六月十三日上海港よりLST船に乗り、六月十五日佐世保入港、伝染病防疫のため十日間沖合に待機のと六月二十五日上陸。翌二十六日佐世保発、六月二十八日無事家族の待つ舞鶴に復員しました。ラバウル行きが変更になったこと、野戦

自動車廠に技術兵として転属したことが私を助けてくれたと思っています。本当に運不運は紙一重でした。

私の半生記

熊本県 松村包雄

早くも歳月は流れて五十余年前のことになった。昭和十三年五月補充兵役であった私にも、ついに来るべきものが来た。同年徴集の現役兵よりも一年遅れの入隊である。当時、私は台北に在住していたので、応召先は台湾歩兵第一連隊補充隊であり、砲銃隊に編入され機関銃の教育を受けた。

同年九月一期の検閲を終えて急遽中支派遣台歩一転属の命令である。九月五日基隆港を出港、中支へ向かった。年老いた両親を残していくことは気がかりなことであったが、逃れようもなく思いを残しつつの船出であった。

九月十七日、台歩一連隊本部に追求して同僚とともに第一機関銃中隊編入となった。我が中隊の陣地は灌木と